

『父が自分の身を呈して教えてくれたことⅥ -最終回-』

高名祐美

11月23日、父の月命日。実家へお参りにいくと、それまで床の間にあった父の祭壇がきれいに片付けられ、遺影は母と並んでかけられていた。お盆には納骨もすませた。妹と父のことをあれこれ話すのも回数が減ってきた。妹家族の暮らしぶりに、父がいなくなったことを実感する。時が経つというのはこういうことなんだろうなと思う。

これまで5回にわたって、父のことを書いてきた。突然寝たきりとなり、治療できるすべもないと知ったときから亡くなるその時までのこと。どこか距離を感じていた妹家族と自分とのこと。そして、父が私に自分の生き様を通して伝えてくれたたくさんしたこと・・・今回は父の生涯を振り返り、このシリーズの最終回としたい。

父は25歳で結婚。一人娘のかおるさんの家に婿にきた。そして二人の娘に恵まれた。母とはお見合い。22歳の美人のかおるさんに一目惚れだったそう。中学校で体育の教師を務める父は、真面目で努力家。何事にも手をぬかず、人から頼まれると嫌とは言えない性格だった。部活動の顧問も熱心に取り組み、バレーボールや水泳、野球などの指導をしてきた。子どもの頃、夏休みには父の勤める学校に行って、グラウンドや教室で妹と遊んだことを思い出す。

家族4人の時間をとても大切にしていた父。しかし家族旅行は計画性がなく、常にいきあたりばったり。宿泊先も決めずに、ポンコツの車で地図を片手に出発する。途中で車が故障したり、道を間違えることはしょっちゅう。でも「すべての道はローマに通じる」と私達に豪語し、堂々としていた父。そんな父に母は文句を言いながら、結局従っていた。山菜採り、きのこ狩り、魚釣り、バーベキューと、たくさんのおもしろいことを家族で楽しんできた。

愛する妻のかおるさんは、難病を患って61歳で亡くなった。母が亡くなる前の6ヶ月間は、病室で寝泊まり。母が好きだからという理由で、病室（個室）で金魚まで飼って、妻の側で一日過ごしていた。それでも優しい父は、母の葬儀の後、「十分なことがしてやれなかった。かおるには自分しか頼るものがいなかったのに」とトイレで泣いていた。

父は4人の孫に恵まれた。もともと子煩悩な「じいちゃん」は孫を風呂に入

れ、風呂上がりには自分のあぐらの中に孫を抱き、熱燗の酒を飲む。そんな時間が最高の幸せだと眉毛を下げて語っていた。姪や甥の子どもたちからも「おっちゃん」と慕われていた父。人をいっぱい愛してくれた。

寝たきりとなってしまう、自宅で過ごした最後の1ヶ月間は、たくさんの人に「よしおさん」と声掛けられ、ケアをしてもらった。その都度父は手を合わせ、「ありがとう」とお礼を伝えていた。たくさんの人に愛情をいっぱい注いだ分、あたたかいケアを受けることができたんだと思う。

家族を愛し、大切に思うこと、人を人として尊敬すること、人を思いやる行動をすること、感謝の言葉を伝えること、頼まれたことを自分にできる限り引き受けること、真面目に努力すること。お父さんから教わった多くのこと、忘れずに生きていこうと思います。みんなで仲良くしていくから。心配しないで。お母さんと仲良く過ごしていてね。